

親鸞聖人の業思想

稲葉賢

親鸞聖人の業思想という場合に、最初に想起せられるのは、『歎異鈔』に見える宿業の思想である。『歎異鈔』は勿論親鸞聖人の述作ではないけれども、この宿業という考え方が聖人の多くの述作の根本に流れていることは否定することができない。そのことは聖人の述作の上に明かに看取せられることである。

凡そ聖人の業思想には二面のあることが注意せられねばならない。それは聖人の業という用語を辿ることによって明かにせられる。^①例えば『浄土和讃』に、「一切の業繋ものそこりぬ」「業垢をのぞぎ解脱をう」とあるように業繋といい、業垢という場合の業は明かに有漏業である。殊に業垢の左訓には「あくこふほむなうなり」という左訓があることから明かである。そして煩惱悪業という用語が、『教行信証』信巻、『尊号真像銘文』、『一念多念文意』、『弥陀如来名号徳』等に用いられている。そのほか、罪業、雑業、善業等何れも有漏業として用いられている。

然るに聖人には、浄土の業因、報土の業因、往生の業因、誓願の業因、他力の至心信樂の業因、正定の業因、正業正因、正定業、浄業、浄土の業、往生の業、真実の行業、正業、真実の業、大願業力、本願業力等の用例があつ

て、それらは明かに無漏の業である。殊に『教行信証』信巻には、白業、黒業を別つて、

「白者即是選択摂取之白業、往相廻向之淨業也、黒者即是無明煩惱之黒業、二乘人天之雜善也」

とあって、有漏無漏の二業を対照的にあらわしている。従つて聖人の業思想には有漏無漏の二業が対応的にあらわれているのであって、このことは聖人の教学において、他力の信を成立せしめる原点となるものである。有漏の罪業の自覚がそのまま無漏清淨業によつて救われる他力信の自覚を形成するのであって他力の信を離れて、聖人の業思想を知ることができない。それ故にこの二面が聖人において如何に深く受肉せられていたかを検討しなければならぬ。

① 桜部建「業——親鸞聖人の言葉遣い」（大谷大学編『親鸞聖人』）。

二

宿業という言葉は親鸞聖人の著作には見えていない。それはただ『歎異鈔』に説かれているだけである。然しそれだからといって宿業の思想が親鸞聖人にはないということではないであろう。宿業という言葉ではあらわされていないけれども、人間業が『歎異鈔』にあかされているような宿業として受けとられていることは否むことができないであろう、それは寧ろ他力の信心を旨とする聖人の信仰を根底から支えているものである。『歎異鈔』によれば「よきところのおこるも宿業のもよはずゆへなり、悪事のおもはせらるるも悪業のはからふゆへなり、故聖人のおほせには、卯毛羊毛のさきにいるちりはかりもつくるつみの宿業にあらずといふことなしとさふらひき」と説かれて、我々が現在行ふあらゆる行業が凡て宿業でないものはないというのが聖人の仰せであると示されてい

る。特にここでは「聖人のおほせ」といっているから、恐らく、唯円は常にそうした仰せを聞いたに違いない。この聖人の仰せを聞いて、常に多くの人に起る疑問は、それが決定的な運命論、或は宿命論ではないかということである。『広辞苑』によると

「人間の意志にかかわりなく、身の上をめぐる善悪、吉凶人生諸般の出来事が必然の超人的偉力によって支配せられているという信仰、または思想」が運命であり、従って

「一切の出来事はあらかじめ決定されていなるようにしかならず、人間の努力もこれを変更し得ないと見る説」が運命論であり、宿命論であると説かれている。かくの如き宿命論は古く印度にも、又西洋にも見られる思想信仰である。そしてこうした宿命論を批判したのが佛教思想であり、親鸞聖人の宿命もまた宿命論ではないはずである。然らばその宿命は如何に考えるべきであろうか。

佛教の根本的立場では、神といった宇宙を支配する超人的偉力を立てないのであって、凡ゆる仮定を排して、与えられた現実をありのままに見る如実知見の智慧を説くのである。一切諸法は因縁より生ずるといふ縁起の法も如実知見の智慧による所証である。そして縁起の法に強く結びついているのが佛教の業論である。凡そ人間存在を如実に見れば、それは常に行為的存在として捉えられる。即ち身口意の三業に互る行為を離れて人間存在はあり得ない。ここに業（行為）という問題が最も現実的な人間の問題としてとりあげられるのである。

凡そ業には善悪無記の三種が分類せられ、「因是善悪、果は無記」ということは、大小乗を通じての業論の基本である。即ち善悪の業はそれぞれに苦楽の果を招くのであって、果報としての苦楽は無記である。それ故に善因果果悪因苦果ということが業の因果である。それ故に人間が苦楽の果を問題とするときにはその果報を招いた過去の業

が問題とせられるのであって、それが宿業である。

然るに『歎異鈔』では、

「よきところのおこるも宿業のもよほすゆへなり、悪事のおもはれせらるるも悪業のはからふゆへなり」といって、善悪の業がそのまま宿業であるといい、この善悪の業によって苦楽の果報を生ずることは問題とせられていない。ここに親鸞聖人の宿業観は一般佛教の業の思想と全く異なるものであることが指摘せられている。^②

たしかに善悪の業のみが果報も引くのであって、無記の業は果報を引かない。それ故に我々は苦果を招かないように、善因を修めねばならない。悪因を行ずれば苦果を招くからである。人間の苦楽は過去の業に依って限定されるのであって、人間が苦楽の果報を問題とするならば、その果報を招いた過去の業、即ち宿業が問題とならざるを得ない。然し過去の業は現在の業と切り離して考えられないのであって、現に造り、これから造ろうとする業が問題となる時、始めて過去の業が真実に問題となるのである。苦楽の果報が過去の業を因とすることは否定できないけれども、それだけで果報が決定するのではなく、人間の努力によって、苦楽の果報が動かされるのである。そこには、善悪の業を選択する自由がなければならぬのであって、佛教の業論はかくの如き人間の努力（土用の因果）を認めるところに特色があり、そこに自ら運命論や宿命論が批判せられているのである。それ故に佛教の業論には論理的色彩が強いといえるであろう。

然るに『歎異鈔』の宿業論は、よき心の起るのも、悪事の思われせられるのも、現に我々が造る業も、そしてこれから造ろうとする業も、凡て宿業の催す故であるという決定論のように見える。一般佛教の業の思想のように、現在の苦楽の果報の上に過去の善悪の業を認めつつ、同時に現在の業の上に善悪を認めて、現在を過去の果である

と共に未来の因を考えるのではなく、未来の因となるべき現在の善悪の業が凡て宿業の催しとする決定論は、明かに佛教の業論と異なるものである。ここでは現在の業の上に善悪を選択する自由が全く許されていない。たしかに『歎異鈔』の宿業論はそのように見えるのであって、佛教一般の業論とは異するという所論は正しいであろう。然し、『歎異鈔』の宿業論はそのように佛教一般の業論と異なるのであろうか。そして親鸞聖人の業思想は、『歎異鈔』が明かに聖人の仰せと仰っているように、こうした決定論であるといっているものであろうか。

たしかに『歎異鈔』の宿業論は、現在の我々の善悪業が凡て宿業によって動かされると説いている。然しこの所論には、こうした決定論のような表現をせずにいられぬ前の段階があるように思われる。即ち佛教一般の業論から出発して、というよりも、佛教一般の業論に立たなければ、恰も決定論と思われる宿業論は生れなかつたということである。即ち親鸞聖人の業論には二重性があるということが云えないであらうか。

凡そ親鸞聖人の信仰ほど鮮かに倫理性、（ここで云えば業の善悪）を超越した教はないであらう。聖人の信仰に倫理があるというならば、それは明かに誤りである。然し同時に倫理がないといえ、それも誤りではないであらうか。他力信の一念は、徹底的に倫理的世界を超えている。

「本願を信ぜんには他の善も要にあらず、念佛にまさるべき善なきゆへに、悪をもおそるべからず、弥陀の本願をさまたぐるほどの悪なきがゆへに」

「煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなることあるべからざるをあはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり」（『歎異鈔』）

などという教説ほど、鮮かに倫理を超えた宗教的眞実を明かにしたものはない。然し倫理を超えるということは、

倫理を否定することではない。却って、聖人の信仰の底には倫理が渦巻いて、それが宗教的眞実の世界に超躍せしめる支えとなつてゐるのではないであらうか。即ち善もほしがらず、悪もおそれなしという信心歓喜の世界を成就せしめる底辺には、罪惡深重、煩惱熾盛の凡夫という悲泣がなければならぬ。そしてその悲泣の契機になるものは、悪を恐れ善を追究する道念である。この道念なしに、如何にして善もほしからず、悪も恐れなしという宗教的眞実の世界に超出することができ得るであらうか。煩惱具足のわれらは、いづれの行にても生死をはなることあるべからずということは、廢惡修善の道念のきわまりをあらわすものであつて、その悲痛なしに、惡人成佛のためという本願の本意に触れることができるはずがない。それ故に、惡人成佛という宗教的眞実の底には、常に惡を恐れ、善をもとめる道念が渦巻いてゐるといわねばならぬ。

かくて聖人の業論にあつても、一般佛教における業論のように、現在の善惡業に於ける努力によつて未來の果報を期待するということが底辺にあつて、しかもその努力の限界を自覺するところに、凡ゆる自力の行業が無効であり、その努力すらも凡て宿業の催しに外ならぬとする宿業感が生れてくるのではないであらうか。即ち聖人の

「悲しき哉愚禿鶻、愛欲の広海に沈没し、名利の大山に迷惑して、定聚之教に入ることを喜ばず、眞証之証に近づくことを快しまず、恥ずべし、傷むべし」

という恥傷は、実は愛欲名利を離れようとする努力の限界の上に自覺せられた懺悔に外ならぬ。人間の如何なる努力も、それが自力に基く限り超えることのできない限界を自覺せしむられぬのであつて、この努力なしに自力無効の限界が自覺せられるはずはない。それ故に現在の善惡の業によつて未來の果報を改めることができるという業論は、聖人の上にないのではなくて、寧ろそれが底辺になつてゐる所に、いづれの行も及び難く、如何なる修善

も雜毒に外ならぬ地獄一定の自覚が生れるのである。そしてそこに宿業が自覚せられるのであって、機の深信は宿業の自覚であるといわれ得るのである。してみれば、聖人の宿業観は佛教一般の業論の原則を否定するものではなくて、却つてその基盤の上に決定論の如く見える宿業観が生れたのであって、かくの如き二重性の上に聖人の業論を見出すことができるように思われる。

まことに我々が如何に悪を恐れ、善を求めても、どうにもならぬ人間の限界に悩みぬいた人が親鸞聖人である。

「凡夫といふは、無明煩惱われらがみにみちみちて、欲もおほく、いかり、はらたち、そねみ、ねたむころおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえずたえずと水火二河のたとへにあらはれたり」という自覚は、人間が自らの努力で、如何に悪を制し、善を修めようとしても、そこに超えることのできぬ限界があることを示すものであって、「いかり、はらたち、そねみ、ねたむころ」は、常に人を傷つける悪い心であるけれども、それを我々は如何にして自力で制御し得るであろうか。それを抑えようとすればするほど、どうにもならぬ人間凡夫の実相に眼ざめずにはいられない。

「いづれの行も及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」

という歎きは、人間の努力を超えたぎりの限界に立つての懺悔にほかならない。

ここで宿業という言葉の意味からすると、宿とはさきという意味であるから、過去の業ということになるであろう。然し過去の業は現在の業と離すことはできないのであって、現に行爲する私の煩惱具足の姿の上に、過去の限りない業を感じるのである。

「自身は現に罪惡生死の凡夫、曠劫已來常に没し、常に流転して出離之縁あることなし」

という善導の文は、現在の行為的自己の上に曠劫已来の宿業を感ずると共に、出離之縁あることなしという未来の果を見ているのである。そして自身は現に罪悪生死の凡夫という現在は、行為的存在としての自身であって、それは如何に罪から脱出し、悪を排除しようとしてもどうにもならぬ限界に立った自覚である。親鸞聖人が三心積の上で、

「一切の群生海、無始より已来乃至今日今時に至るまで、穢悪穢汚にして清浄の心なく、虚仮誑偽にして真実の心なし」

といわれたのも、諸有の一切悪業煩惱邪智の群生海をあらわされたのであって、一切群生海の姿がそのまま親鸞一人の姿と内感せられたのである。それ故に、

「卯毛羊毛のさきにいるちりはかりも、つくるつみの宿業にあらずといふことなし」

といっても、それは凡て過去の業に責任転嫁するのではなく、寧ろ悪を離れようとしてどうにもならぬ現在の業の懺悔に外ならないのである。この懺悔の深層で、聖人は始めて「罪悪深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願」を聞いたのである。そして、

「親鸞におきては、ただ念佛して弥陀にたすけられまいらすべしとよき人のおほせをかうふりて信するほかに別の仔細なきなり」

という他力の信心に生かされたのであって、この他力の信心をなりたたしめる場が、宿業の懺悔である。それ故に他力の信心を離して宿業を考えるならば、宿業観は多くの誤解を産むに違いない。

宿業を一念の信心から離して、之を対象的に眺るとき、所謂宿命論や運命論と混同されるのである。即ち運命論

は一切の出来事があらかじめ決定されていて、なるようにしかならぬとするのであって、それは宿業を対象的に眺めて自己の責任を回避し、それを常に超人間的偉力の所為とするから、それは全く他律的であって、そこには人間の努力の限界に立つ深刻な悲しみが無い。之に対し宿業観は凡ゆる罪惡を自律的に自己一人の上に受けとって、そこに宿業を懺悔するのである。そこに善惡の業が総じて宿業の催しであると自らの罪の深さと惡業煩惱の重さとが自律的に受けとめられると共に、

彌陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、そこばくの業をもちける身に於てありけるを、たすけんとおほしめしたちける本願のかたじけなさよ」

と一念の信心が躍動するのである。

かくて宿業は自己一人の上に受けとめられるものであるから、これを他人に対して、それはお前の宿業であるなどとはいってはならないし、又決して言えない言葉である。宿業は自己一人の自覚があればこそ、私一人の救いつながるのである。従って宿業を感じる悪人こそ、「他力をたのみたてまつる」悪人であり、「本願をたのみまいらする」悪人である。

かくて宿業観は、佛教一般の自因自果、自業自得の原理を底辺として成り立つものであって、最も自律的な一人の主體的自覚であり、それこそ人間存在の原点に立つ自覚懺悔であるといわねばならない。

然も宿業観に基づく懺悔は、罪惡から解放せられることではなく、却って罪惡を自らの上に限りなく負うてゆくのであるから、この懺悔においてのみ大悲の本願に帰するのであり、佛願他力に乗ずることにおいて、そこに無導自在の世界が開けてくる、まことに念佛者は無導の一道といわねばならぬ。然らば、この無導の一道は如何にして

開けてくるであらうか。

① 舟橋一哉著『阿毘達磨俱舍論業品要義』

宿命説は宿作因外道の説く所で「この人間がいかなる業、或は苦、或は不苦不樂を感受しようとも、その一切は以前において作られたるものを因とする」と主張する。

② 上田義文著『佛教における業の思想』

③ 曾我量深著『歎異鈔聽記』

三

かくの如く宿業は、無有出離之縁の人間業を自覚せしめるものであって、それは無始流転の業であり、如何にしても離れることのできない人間の業繫となる有漏業であることは云うまでもない。その有漏業たる宿業の自覚が、親鸞聖人の信一念を支えるものであることは明かであって、そこに聖人の業思想の一面を知ることができる。然るに聖人の著作には既に述べたように、「報土の業因」、「正定の業因」としての無漏業について語られる用語が頗る多く、深い宿業の自覚のなかに、無漏清浄の大願業力に帰せられたのであって、寧ろ無漏業こそ、親鸞聖人の業思想の中心をなすことが注意せられねばならない。

無漏業とは、さとりに至らしめられる梵行であって、それは有漏の善業ではない。如何なる善業も、それが人間（自力）に属する限り、無漏の業ではない。まことに眞実証を成就せしめる業は無漏業であって、聖人が徹底的に人間（自力）に属する有漏業を往生の業とせず、ただ如来の無漏清浄業を往生の業として、他力廻向の宗義を顕彰

せられた意義を思うべきである。然らば、かくの如き無漏清浄の業は如何に領解すべきであろうか。

凡そ往生の正業が念佛であることは、親鸞聖人の信仰にあって動かすことはできない。そしてそれは念佛往生という事で標示せられて来た浄土信仰の根本的立場である。それ故に、浄土真宗の綱要を説く『正信偈』には、

「本願の名号は正定の業なり、至心信樂の願を因となす」

と説き、『教行信証』行卷には、更にくわしく

「称名は則ち是最勝真妙の正業なり、正業は則ち是念佛なり、念佛は則ち是南無阿弥陀佛なり、南無阿弥陀佛は即ち是正念也」

と示していられる。まことに念佛は往生の正業なるが故に、それは正定の業因となるのである。何故なら、念佛は往相廻向の正業として無漏清浄の業だからである。然らば念佛は何故に無漏の業なのであろうか。蓋し、念佛信仰にまつわる惑いは、無漏清浄業たる念佛を有漏雜善の業に顛落せしめる自力の執心であって、そこに

「人のしうしんじりきのしんは、よくよくしよあるべし」(思慮) (惠信尼消息)

と聖人をして歎せしめたものである。それ故に念佛信仰の歴史は称名念佛を無漏清浄業に昇華せしめる歴史であったといつてもいいであろう。そしてそのことを徹底的に果遂した人が親鸞聖人であった。ここにわれわれはまず親鸞聖人が真実之教と定められた『大無量寿経』に着眼しなければならない。

『大無量寿経』によれば、法蔵菩薩は二百一十億の諸佛国土を覩見して、餽悪なるものを捨て、善妙なるものを選び取り、以て莊嚴佛国の清浄之行を撰取せられたと説かれている。そのことを元祖法然上人は『選択集』本願章に

「弥陀如来餘行を以て往生の本願と爲したまわず、唯念佛を以て往生の本願と爲し給うの文」

と標して、諸佛浄土のなかには、布施持戒等の行を以て往生の行とするものがあるけれども、弥陀の浄土はこれらの諸行を選び捨ててただ念佛の一行を以て往生の行とせられた願意を明かにしてられる。古来、勝易の二徳といわれるものであって、念佛は易行易修であり念佛はまた万徳の所帰であるから如来によって念佛が往生の業として選択せられたのである。これは明かに有漏の諸行を捨てて、無漏清浄の行として、念佛を選取せられたことを示すものである。それ故に、『大経釈』〔漢灯〕一、二四左)には

「称名念佛は彼の佛の本願の行也」

といい、念佛が本願成就の無漏清浄の行であることを明している。それ故にこそ、称名は正定業となるのであって「故に之を修する者は彼の佛願に乗じて必ず往生を得るなり、願虚しからざるが故に念佛を正定業と爲す也」といって、念佛するものはまさに佛願に乗じて往生の証果を得ることを明してられる。そしてその正定の義を積して、

「但し正定とは法蔵菩薩二百一十億の諸佛の願海中において念佛往生之願を選定するが故に定と云う也」

と云い、正定の定は選定の義なること、そしてその選定とは無漏業の選定であることを示してられる。これはまさしく正定業といわれる根本義であって、そこから、定は決定の義で念佛は決定業を意味するのである。決定業とは決定して未来の果を感ずるのであって、親鸞聖人は『三経往生文類』初右に

「大経往生といふは如来選択の本願不可思議の願海これを他力とまふすなり、これすなわち念佛往生の願因に
よりに必ず滅度の願果をうるなり」

といい、念佛がまさに本願他力の行であって、この無漏正定業によって決定して必至滅度の真実証を得ることを明かにしてられる。『執持鈔』^十左に

「名号を正定業となつくることは、佛の不思議力をたもてば、往生の業はまさしくさだまるゆへなり」とあるのも、決定業の意味である。

もと正定業の名は善導大師の『散善義』に出ずることは云うまでもない。ただここで注意しなければならぬことは、善導が正雜二行を分つ場合の正は、雜に対するのであって、読誦と云えば、一心に専ら『觀經』『阿彌陀經』『無量壽經』等を読誦するのであり、礼拝と云えば一心に専ら阿彌陀佛を礼拝するから正行と云うのである。之に対し正定業の正は助業の助に対するのであって、前三後一の正行の如く、助業の正行ではなく、まさしく往生の定る正行であるから正定業というのである。さきの『執持鈔』に、「往生の業はまさしく定るゆへなり」とあるのはこの意味である。

更に業の字は業因の義であって、『銘文』^八左に

「正定之業者即是称佛名といふは、正定の業因はすなはちこれ佛名を称するなり、正定の因といふはかならず無上涅槃のさとりをひらくたねとまふすなり」

とあって、業は業因の義である。「招果為因亦名為業」と云われる如く、果を招くを因といい、その因を又業と名ずける。今念佛は往生の因であるから業と名ずけるのである。ここに往生の因とは無上涅槃の因であるから、『銘文』には「無上涅槃のさとりをひらくたね」と示されたのである。従つて無上涅槃のさとりのたねである為には、その因は必ず無漏清浄の業でなければならぬのであって、ここに念佛が無漏清浄業でなければならぬことが明

かにせられるのである。

然るに念佛といえ、それは常に称名念佛である。それ故に『選択集』には、

「正定之業とは即ち是佛名を称するなり」

といている。まさに称名念佛は正定業であるけれども、ただ徒らに称える称名は正定業ではない。『一念多念文意』一六には

「是名正定之業願彼佛願故といふは、弘誓を信ずるを報土の業因とぎだまるを正定の業となづくといふ、佛の願にしたがふがゆへにとまふす文なり」

と釈して、弘誓を信ずる一念の信が報土の業因であるといっている。そして信心を業因といっていることは注意せられねばならない。

蓋し称名念佛は正定業であるけれども、それはただ徒らに称えることではない。如何に多く称えても、弘誓を信ずることがなければ往生定まらず、信心決定するところに、往生の業事が成弁するのであるから、信のうへの称名念佛のみが正定業となるのである。『執持鈔』十に

「もし弥陀の名願力を称念すとも往生なを不定ならば正定業とはなつくべからず、我すでに本願の名号を持念す。往生の業すでに成弁することをよろこぶべし」

とあるのもこの意味である。このことは、称名易行を以て往生の業と定めた龍樹も既に『易行集』九のなかに

「若し人善根を種えて疑へば則ち華開けず、信心清浄なれば華開いて則ち佛を見たてまつる」

といつて、はっきりと信疑の得失を明すことよって、称名念佛が本願成就の無漏業であることを示したのである。

従つて七祖相承の歴史においては、念佛が無漏の業であること即ち他力の行であることを信心を以て裏づけられているのである。念佛は凡夫有漏の業ではないから、それが我々の往生の業となる為には、必ず信心を以て受持せられねばならぬ。それ故に念佛は、佛の方から云えば、他力廻向の行であり、衆生の方から云えば、信の上の称名であつてそこに称名正定業の義が成就するのである。既に明かにしたように、称名正定業の義を明かにしたのは善導であるが、親鸞聖人はこの散善義の文を「信巻」に引用していられるのであつて、それを『六要鈔』の釈には『会本』四一八左「別して他力相統之徳を明す」

と云い、特に『散善義』の「念々不捨者」の文に就いて、

「但し念々不捨者の句に就いて其の二義有り、一義に云く、此れ行者の用心意業を積す、速かに衆事を抛つて一心に称名を励むべき義也、一義に云く凡夫の行者此の義得難し、一食之間猶其の間有り、一期念々争でか相統を獲ん、既に佛願に帰す、機法一体能所不二自ら不行而行之理有るが故に不捨と云うなり、機の策励に非ず是法の徳也、当流の意に依らば後義を本となす」

と注意している。蓋し称名念佛は機の策励ではないのであつて、無漏清淨の行である。従つて、佛願に帰する法の徳としてあらわれるのが念々不捨者の称名なのである。それ故に親鸞聖人は

「眞実信心には必ず名号を具す」

と云つたのである。それは善導が称名正定業を「順彼佛願故」で結び、その意を承けて、法然上人が「称名念佛は是彼の佛の本願の行也」

と云われたことを相承せるものである。ここに本願の行としての念佛が無漏の業でなければならぬことがあらわさ

れたのである。『教行信証』行巻に

「謹んで往相廻向を按ずるに大行有り、大信有り」

といい、その大行を明して

「大行とは則ち無尋光如来の名を称するなり、斯の行は即ち是諸の善法を撰し諸の徳本を具せり、極速円満す真如一実の功德宝海なり、故に大行と名づく」

と云われた所以である。

かくて念佛は無漏の業として他力廻向のものであるから、それを領受するにはただ信心を以てせねばならぬのであるが、その信心がまた有漏自力の信であるならば、称名正定業とはならず、折角の無漏の清浄業を有漏業に顛落せしめることになるであろう。ここに親鸞聖人の鋭い洞察があつたのである。「信巻」別序に

「然るに末代の道俗近世の宗師、自性唯心に沈んで浄土の真証を貶しめ、定散の自心に迷つて金剛の真信に昏
し

と歎ぜられたのもこの点にあつたのであらうし、そこに特に「信巻」を別開し、「化身土巻」を開いて、信心他力の義を強調せられた所以を注意しなければならない。

まことに、「有漏の業の因果は迷いの世界を支配する原則であつて、悟りの世界に関わりをもつものではないから、往生の業としての念佛は有漏の業であつてはならない」^①そして念佛が無漏の業として往生の行である限りは、それを受持する信もまた有漏雑染の信であつてはならないのであつて、ここに信心もまた他力廻向の信心でなければならぬことを強調せられたのが親鸞聖人である。

遠く『大經』には胎化二生を明して、胎生の失が不了佛智であり、その不了佛智は修諸功德と修習善本であることが明かにせられている。この修諸功德を説けるものが願で云えば第十九願、經で云えば『觀無量壽經』である。

又植諸徳本を明すものは願で云えば、第二十願であり、經で云えば『阿彌陀經』である。修諸功德は明かに諸善万行であつて、有漏の行である。何故なら、諸善万行はわれわれがわれわれの意志において修するものであつて、それは如何に激しい菩提心の上になざれようと、有漏雜染の行であることを免れない。善導の至心積には、『散善義』右

「縦令身心を苦勵して日夜十二時急走急作して頭燃を炙うが如くすれども衆て雜毒之善と名づく」といい、「信卷」信業積には

「一切の凡小一切時中、貪愛之心常に能く善心を汚し、瞋憎之心常に能く法財を焼く、急作急修して頭燃を炙うが如くすれども衆て雜毒雜修之善と名づく」

と云われる如く、それは善業ではあつても常に有漏雜善であることを免れない。それ故にこれらの諸功德が涅槃をさとる業因となり得ないことは明かである。又修習善本といわれる善本は如来の嘉名であり、一切善法之本であるから善本といわれるのであるが、しかもそれを能修する心は自利の一心であつて、行業は一切善法の本としての如来の嘉名、即ち無漏清淨の業であつても、それを己が善根とし、それを修する心は定散自利の心である。そしてその定散自利の心が無漏清淨の業を有漏雜染の業に顛落せしめるのであつて、かくの如き業行を作すものは、心に三慢を生じ、名利と相応し、同行善知識に親近せず、雜縁に近ずいて、往生の正行を自障々他するから、出離の期を得ることは難いのである。ここに親鸞聖人は、修諸功德と修習善本を方便として、眞実の信心、無漏清淨の信心を

磨き出したのである。ここに

「夫れおもんみれば信樂を獲得することは如来選択の願心より発起す」〔信卷〕別序

として、信心もまた大悲廻向の信心でなければならぬことを明かにせられたのである。他力廻向の信心、無漏清淨の信心であってこそ報土の業因となるのであって、「信卷」の中心課題は、ひとえに眞実信心が他力廻向であることを明かにするにあつたのである。即ち

「信心と言うは則ち本願力廻向之信心也」〔信卷〕

であつて、この信心こそ清淨報土の真因となるのである。まことに

「若しは行若しは信一事として阿弥陀如来清淨願心之廻向成就し給うところに非ることあることなし」

であつて、行も信も如来清淨願心の廻向成就でないものはない。この行信が無漏清淨であればこそ、それは眞実報土の業因となるのである。

かくの如く報土の業因としての行信が、如来廻向のものであることを明して、往生の行業が無漏でなければならぬことを徹底したところに親鸞聖人の宗義の特色があるのであって、これが聖人の業思想の重要な一面である。ここに有漏の業（自力）を捨てて、無漏の業（他力）に帰する他力眞実の教法が明かにせられたのであって、まさに自力を捨てて他力に帰する信一念を明かにする根底には、聖人の徹底した業思想が流れていることを思はずにはいられない。

（完）

① 舟橋一哉「有漏業と無漏業」大谷学報四七ノ四。